

# 桃山学院大学チャペル地割式のための祝辞

1987年5月15日

桃山学院大学チャペル建築予定地

本日ここに参り、あなたがたから差し伸べられた歓迎の素晴らしい気分にあたり、この大学の新チャペル建設の印をおくことができるのは、私にとって大きな喜びであります。このチャペルは、ここ桃山学院大学におけるあなたがたの活力と繁栄とをあらわす新たな印となるでしょう。今から約100年前、大阪の聖三一教会の近くに聖公会系の学校が開設されました。この学校を開いたのは、英国カンタベリーのすぐ近くから来た宣教師ワレン師でありました。その後、この学校は繁栄し、当地に礎を据えるまで二度にわたって移転いたしました。28年前、この大学はあの100年前に創られた学校と同じキリスト教精神に基づいて開学されました。私の先任者、ジェォフリー・フィッシャー大主教が1959年に開学式に出席いたしました。

今から2年後には、あなたがたはこの大学の開学30周年をお迎えになります。この発展を記念して新しいチャペルが奉献されようとしています。この大学の中心に建てられるキリスト教のチャペルは、この大学におけるキリスト教的伝統の力強さのみならず、桃山におけるキリスト教に基づく生活と信仰の存在、ひいてはそもそもあなたがたがここ桃山学院大学に存在する根拠そのものを常にはっきりと思い起こさせるものとなるであらう。

したがって、与えられた短い時間の中で、私は、如何なる目的のために、このような伝統と特色を備えたあなたがたの大学が存在するのか、という最も基本的な問題について問いかけてみたいとおもいます。私は、この大学はここへ来る人々すべてに自らの自由を得させる為に存在していると確信しております。

今、かりに私が本学年度末にこの大学を卒業していこうとしていると仮定してみましょう。どのような意味で桃山学院大学は私を変革してくれたでしょ

う。この国ならびに他の国々の社会や経済生活について、私は以前よりも多くのことを知ることができたでしょう。以前より増した分析力と批判力を身につけて卒業していくことでしょう。私が卒業までに知り得ることは、もはや漠然とした知識のかたまりではなくなっているでしょう。私は、現代社会において自らの道を進むための一層優れた素質を身につけた者となっていることでしょう。

しかしながら、このように技術や知識が増加し、分析力が深まったからといって、それだけで終わりになるというわけではありません。私たちの知識や分析力、あるいは批判力といったものは、生涯を通じて私たちが自由を手にするための手段であります。その目的を果たすための素養をあなたがたは大学時代に身につけるのです。しかし、これは常に努力を要することでしょう。

例えば、多数集団の意見による圧力に抵抗する努力があげられます。それは大学のような場所ではかなり容易なことでしょう。しかしながら、私たちが職に就き、気がついてみると自分の周りには新聞に書かれたりテレビで報道されることを何の疑問も抱かずに鵜呑みする人々ばかりであるような場合には、これは次第に困難になってきます。私の人生においてもっとも影響を与えてくれたのは、多くの場合、独創的で時には常軌を逸しているとさえ思えるような見解をもった人々でした。私の通った大学と同じように、この桃山学院大学にも今なおこのような独創的な性格の持ち主がひそかに存在していることは間違いありません。このような人々を宝物のように大切にしてください。そのような人々はあなたがたに自主性をもつことを教えてくれるでしょうし、この自主性こそは大いなる自由であります。

私たちが抵抗しなければならない、もう一つの圧力は、極端な単純化による圧力であります。批判力を伸ばす鍛錬を通して、私たちは物事の複雑さに気づき、人々がよく行う単純化に警戒心を向けるようにならなければなりません。私の国には、「幸福とは単に金銭上の問題である」とか、「セックスとは単なる肉体的な満足に過ぎない」とか、「企業の抱えている問題は経営陣

である」とか、「企業の抱えている問題は組合である」といったことを簡単に口にする人々がいます。こういった発言は、安易な、行き過ぎた単純化であり、しかも世間の人々はこのような発言に取り付かれてしまうのであります。

もしあなたがたがこの大学を卒業した後にはこのような圧力の影響を受けないでいることができるなら、ある程度の自由を享受できるでしょう。しかしながら、この自由はそれ特有の危険性を秘めています。それゆえ、ここで私は聖パウロによって書かれた聖書の中の次の言葉を引用しておきます。

「兄弟たちよ、あなたがたが召されたのは実に自由のためである。ただその自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いにつかえなさい」(ガラテア人への手紙 5 : 13)

自由に伴う危険には二つの種類があります。第1の危険は、自分が教育を受けたがゆえに他の人々より自分の方が優れ、重要な人物であると考えてしまい、自己主張のために私たちの自由を行使するという道徳上の危険性であります。すなわち、教育は受けたものの、利己的になった場合です。自由な人間というのは、他のあらゆる制約から逃れて自己の支配下に陥った場合には、危険な人物になってしまうのです。自由を学び取ると同時に社会の誠実な一員となるようになることが、あなたがたのような大学の長所でなければなりません。誠実さは時として物笑いの種にされますが、確かにその誠実さが偏狭であったり、尊大であったり、堅苦しいものである場合には嘲笑されるべきものです。しかし、学校とか大学というところは、個人の場合と同様に、人々に愛されることによってのみ栄えるものです。いわば、一種の私たちの愛情の養育の場としての役割を果たしているのです。そして、私たちは自らの愛情を広げる前に、まず深めなければなりません。桃山学院大学には一つの誇りがあります。これは望ましいことです。これこそ利己的にならんとするいかなる傾向に対しても均衡を保つ働きをするものです。

さて、第2の危険は知的なものです。私たちの自由は私たちを冷笑主義へと導く恐れがあります。他人の人生を導く信念や原則はあざ笑われ、何事で

あれ、それを正そうとする試みは放棄されてしまうのです。自由を通して強くなるはずの人々がただただ軽薄なだけの人物になってしまうのです。真理に係わる諸問題や神の存在とか人生の目的などは現実の問題であります、私たちは、いずれはひどい目にあうかもしれないのに、こういった質問を避けたり、冷笑してしまうのです。

賢いけれども利己的であるとか、賢いけれども冷笑的であるとかいうことは、自由に対する真の脅威ではないでしょうか。このような態度は自由を歪め、やがては我々に自由を与えてくれなくなる可能性があります。

社会に対する誠実と奉仕の気持ちによって均衡の保たれた自由。人生に対する最も深い確信への尊敬の念によって均衡の保たれた自由。これこそ、学生諸君がこの大学に存在する意義ではないでしょうか。「兄弟たちよ、あなたがたが召されたのは実に自由のためである。ただその自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いにつかえなさい」。

キリスト教信仰は、真に自由な人、すなわち御自身が愛することにおいても自由であり、他の人を受け入れることにおいても自由であり、死において悲しみを勝利に変えることさえも自由にされ、他の人のために生きるよう神から遣わされた人、イエス・キリストを中心に置いているのであります。

それゆえに、あなたがたの大学が、その中心として、チャペルにいわば心臓部を求めようとしていることは正しいことであります。あなたがたの学院の創設者たちは自由のためのキリスト教教育を信じていました。それゆえ、キリスト教精神が偽りのないものであるならば、信仰の異なる人々をも受け入れることができるのです。あなたがたの大学が存在し続けるのは、まさにこのためであります。私は、この大学が大きく成長し、繁栄し、その自由を大切に、また他人への誠実な気持ちと真理への尊敬の気持ちによって、その自由の均衡を保つよう祈るものであります。

神の祝福が皆様方すべてに与えられますように。アーメン